

小説 夢殿

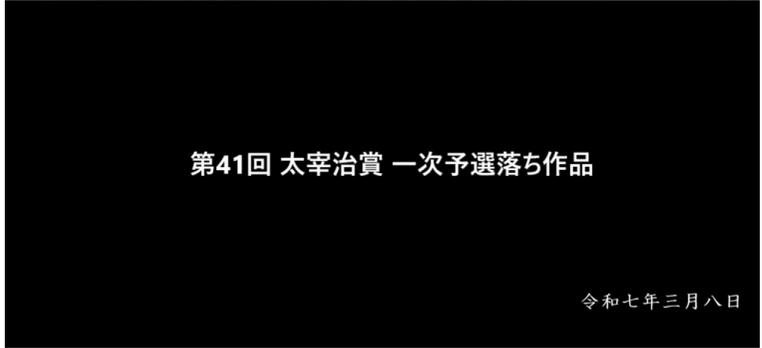
秋涙

コンペ版

作 飛鳥世一

第41回 太宰治賞 一次予選落ち作品

令和七年三月八日



目次

■はじめに	1
小説 夢殿『秋涙』コンペ版	2
その零 二つの罰と二つの飴	4
その一 満と数えのいろは坂	9
その二 錫(すず)メッキのブリキ缶	17
その三 鉄さんの憂鬱	23
その四 鉄さんの秘密	28
その五 お千代の秘密	33
その六 ことわり	38
その七 「なごり藤」	41
あとがき	41

■はじめに

はじめに

「むかーしむかしあるところに……」

そういうものしか理解の対象とならない方は読むべきではない。

起承転結という一つのストラテジーしか受け付けない者にとっては読むに辛いだろう。

書くまでもないことだが、秋涙は、オムニバスのエッセンスを滲ませている。

しかし、起承転結という書きようについては一切有難がってはいない。

従ってどこから読むことも可能な書き口としているのだが、この辺りに免疫を持たない者であり、良しと出来ない者にとっては読むに耐えないのかもしれない。

ブツチャケ書くと、これだけ書いていても書き足りていないところはある。

もう少し書き込むべきだと感じている処はある。

手を抜いたというより、読み手のムネヤケを危惧して書き込むことを止めたのだが……

そういうものになるところが腕の足りなさよなぁ(笑)

感想、ご意見などはお気軽に

mc1.japin396@gmail.com

までお寄せください。

さて、これもわたしの大衆小説ですが——なにか。

書けるものなら書いて味噌汁WWW

小説 夢殿『秋涙』コンペ版

その零 二つの罰と二つの飴

「ええかお千代、お婆ちゃんの云うことしっかり聞きなはれや。お千代はお釈迦さんはわかりますな。そや、むかあし法隆寺を建てはったお太子様が広めた、仏様の教えを一番最初に形にしはった偉いお人や。云うたらお太子はんのお師さんみたいなお人や。そのお釈迦さんがな、生まれてすぐに七歩あるいたそやでなあ、そのときに初めて話しはったのが、天上天下唯我独尊ちゅう言葉だったらしいねん。ん？……あきまへん。そないなてんご言いはったらあかんよ。それをな屁理屈ちゅうねん。ほれお千代、お婆ちゃんの文机から半紙と硯と墨と小筆を持ってきてくれるか。硯に少しだけ水入れてな……はいありがとう。ええかあ、今から書くからしっかり見とくんやで」

そういうとお婆ちゃんは墨をすりはじめましてなあ。随分長いことゴシゴシ、ゴシゴシと墨をすってはったんやけど、私、その間ずっと正座して見てなあきまへんでしたから足が痺れて、いどうていどうて…、墨をすする手が止まったときには足の感覚がのうなってますてん。

スクリーンショット 2025-03-08 18:06:39.448



「お千代、今から書く言葉をしつかり覚えるんやで、次はお千代が書くんやから」

そういうと小筆を握り半紙の上に丁寧な筆遣いで、当時満八歳の子供にはむつかしい漢字を書きはじめました。【天上天下唯我独尊、善因善果、悪因悪果、自因自果】と。お婆ちゃんは一つ一つの言葉を説明してくれはりましてんけどな、ほれが毎度毎度、同じ説明をするものやから長(な)ごうて長(な)ごうて敵(かな)いしまへんでした。ほれがな二つ目の罰でしてんけどな、これが一番こたえましてん。

【天上天下唯我独尊、善因善果、悪因悪果、自因自果】と書かはった後から言葉の説明が朗々とはじまります。「ほなお千代の番や。上手に心を込めて十回書きなはれ」いうのですがそれで終わりしません。「待ちなはれ。硯の墨を捨てて来なはれや、ほして綺麗に洗ってもう一度お水を入れてきなはれ。ほしたら、いちから墨をすってな、ほれから書きなはれ。墨はな心を込めて力を入れてするんやで」というのです。硯を洗ろうて水を入れて戻って来いて随分なイケズ云いますねや、足がしびれて立つことも覚えへんの。それでもなあ、この罰が終わった後にはお爺ちゃんからの飴が待ってましたから、私は一生懸命に我慢をし、涙を堪えて書いたものでした。

お爺ちゃんからのお飴さんはな、紙芝居に連れて行ってくれたり、お芝居につれていってくれたり、黒蜜のかかった葛切りを食べに連れて行ってくれたりで本当に愉しみでした。ありゃあ二人で相談しはって役割分担してはったんやろねエ。お婆ちゃんがな、随分陰険な役回りで気の毒やったもんで、お爺ちゃんと出かけるときは必ずお婆ちゃんにお土産買って帰ったもんです。

お父ちゃんからの罰が一つ目の罰なんでしてんけどな、私、お父ちゃんからの罰が好きでしてん。お母ちゃんは随分心配してはって、初めて柳行李に入れられて押し入れに閉じ込められる私を見て、涙を流してお父ちゃんを止めてはりましてん。

あのな、うちの柳行李に入れられて、押し入れに閉じ込められるのが好きでしてん。なんや知らんけど落ち着きますねん。あの狭い中にいてますと。でもな、柳行李に入らんと押し入れにはいるのは嫌いでしてん。怖いですがやろ、落ち着きまへんやろ。

うちとこの家にはな大きな柳行李が三合ありましてな、長さが四尺六寸、幅が二尺、高さがたこうてな、二尺三寸ありましたから、押し入れに入れると中で蓋があきしまへん。

(※一尺……概ね三十センチ、一寸……概ね三センチ)

最初の内こそお父ちゃんも心配しはったんですやろなあ。押し入れの前で様子を覗う気配は感じられましてんけどな、何度目ぐらいからですよ、閉じ込めたらすぐに居なくなるようになりましてん。

私なこの中で寝るのが好きでしてん。柳行李の中でな「ずいずいずっころばあしごまみそずい……」いうてお茶壺道中の手遊び歌を小さな声で寝るまで歌うんですわ。

暫くするとお母ちゃんが押し入れ障子の向こうから「お千代、お千代……怖いこと無いか？ 苦しいこと無いか？」いうて様子をみにきはりますねん。きつとなあ、私の手遊び歌がむせび泣きでもしているよ

うに聞こえたんですやろなあ。 面妖(おかしな)な子供やったわ。

今ではなあ、鉄さんの描かかった富士山の画や鉄さんからの絵手紙やらお婆ちゃんや、お母ちゃんの形見。ほして今となっては知る者は私しかおらんようになってしまて…あの世まで持って行かにならん私の業(ごう)の深さの証しがいってますねんけどな…あゝせやったわあ、もう一人ややこしいのが知ってけつかる。ほな、他にも知ってる者はおるっちゅうことやろねえ。お母ちゃんのお飴さんはな、ほんまのお飴さんでしたなあ。

三つ子の魂百までもてよう云うたもんです。明治、大正、昭和いう三つの時代を生かさせてもろうてますねんけど、うっとこの柳行李はんが眺めてきた景色には勝てしまへん。お婆ちゃんがよう云うてましたわ。

「お千代、うっとこの柳行李はんにはな付(つく)喪神(もがみ)さんちゅう古いもんにつく神さんが憑いてはるからな、大事にせにゃあかんよ。この神さん粗末にしますと祟りまっせ」いうて。

せやけどなお婆ちゃん、最期の一合となった大きな柳行李はんは私の代で終(しま)いにしまひよな。目まぐるしく移り変わる昭和いうこの時代、古いものはどんどん追いやられ肩身がせもうなってますねん。

質入れされるもんも変わりましたで。あかんあかん、もううち質草覚えられへんわ。いまだき簪(かんどし)もってくるお人なんかいてますかいな。テレビっちゅう電気で画の映る箱がありましてなあ、そんなものを質入れしはるんやけど、これがな店先に飾っておきますとな直ぐに売れますねん。お客はんかえ？ ふふふっゝ変わらへんよ。相変わらずグニ屋はグニ屋のお客はんや。

現代っ子(げんだいっこ)ちゅう若いもんに古いもんを引き継ぐのも、なんや因果含めるようで気の毒におもえてきます。なんせ一億総中流時代ちゅうこっちゃんから、次から次へと新しいものが出てきますやろ。付喪神さんも行き場のうなってますやろなあ。

ふふふっゝここにも古いもんがありましたなあ。

その一 満と数えのいろは坂

奈良いうところは海がないところでしてなあ…。

高等小学校の二年生…、云うてもわからしまへんやろなあ。せやから歳(とし)のころなら十一、十二歳(さい)ぐらいのことでしたやろか。明治も二十年になった頃合い。お父ちゃんやお母ちゃんにはじめて海を見せてもらいましたんけどな。

お伊勢はんへと参ったときに鳥羽ちゅう宿場に留まりましてんけど、二階建ての宿屋はそれはもうお城か法隆寺さんのご本堂のように立派に見えたものでした。

お父(とう)ちゃんがなあ「お千代チョットこっちにおいで」ほう云うので、お父ちゃんの座ってはる窓辺にゆきますと、それはもう見事な桔梗色した海が一面に広がってましてなあ。西に傾きかけたお陽さんを浴びはった海がキラキラキラキラいうて光ってましてん。

子供ながらに毎日こんな海が見られる三重のお人たちを羨んだものでした。宿屋の軒先では私よりも年下の子達ですやろなあ、あちらこちらで手遊び歌うとうてたり竹で編んだ輪を、棒を使って器用に回す輪回しをして遊んではりましてんけどな、奈良ではこのころ既にブリキの輪がありましたん。せやから、輪回しと云えばブリキの輪を回して遊んでいたもので、こんな些細なところでも、あぁ〜奈良に生まれて良かったと思っただけのもの。

手遊びはな、見てるとわかりますねんあ〜なんちゅうて謡いながら遊んではるか…：フンフンずっころばしフフフンちゅうてな。

鉄さんが描かかった画にも仰山(ぎょうさん)、海を描かかったものがありましたんけどな。私は鉄さんの海の画を鑑(み)るたびに、鳥羽の桔梗色した海やお父ちゃんやお母ちゃんを思い出したものでした。そやったわあ、あぁお婆ちゃんに叱られるわあ。あのお婆ちゃんがな、うちとこの柳行李の蓋にな、五合升摺り切り一杯のあずきはんを入れはるとな、こうして抱えると中腰のまま横に傾けながら振ってみせましてんけどな、その音がまた鳥羽の海で聞いた潮騒にそっくりでしてん。ザザザァァァ、ザザザァァァちゅうてなあ。お婆ちゃん、なーんも云わんとニコニコしながら私の顔だけを見て柳行李の蓋を揺らしましたなあ。私が昼寝におちるまで。お婆ちゃん疲れたんですやろなあ。お座りしはってな大事な柳行李の蓋を抱えたまま眠るように逝ってました。

その鉄さんがこの昭和四十二年早春、法隆寺の夢殿さんを描き上げたちゅうことで、法隆寺さんや鉄さんとの縁浅からぬお人達にむけてお披露目の展覧会が行われたのでした。

その画はね、法隆寺の夢殿さんと云われ親しまれてきた、八角円堂を描(か)かかったものでした。三

重県のお伊勢さんと並び称され、一生に一度ぐらいは参ってみたい日本仏教発祥の地である、奈良県は飛鳥地方にご縁起をもつ法隆寺さん。その境内(けいだい)伽藍(がらん)の一つ、夢殿・八角円堂の建設発願者は聖徳太子さんです。

「お太子さま・お太子さん」と親しむのは、何もこの町に住む者に限ったことでは無いようで、毎年、一月の二十日を過ぎた頃でしたか、全国の太子堂を持つお寺さんでは聖徳太子さんをお祀りした太子講が催された様子なども新聞を介して伝わります。お太子さんの寺づくりに由来されるのでしょうか。建築建設に携わる会社や職人さん、物作りを生業(なりわい)とする職人さんたちの間では、そろって無病息災、職場安全を祈願し、お太子さんの遺構を称える勉強会も受けつがれていたようです。人々が暮らす上で様々なまつり事を語るうえで、切っても切り離すことのできないお人であり場所であり…。

画はそんな聖地とも云えそうな法隆寺の夢殿さんを描いたものでした。実はね、私この画を知ってましてん。いえね、正しく申し上げるのなら描いたお人と描いてはった時期を知ってましてん。だってね、描いてはるときに傍で見えていたのですから。

今こうして目の前で出来上がったこの画を鑑(み)てますとね、それはそれは昨日のこのように鮮明に思い出されてくるほどで……。

めんどくさいことや都合の悪いことは忘れることが出来るようになってきましたんけどな。昨夜の夕餉(ゆうげ)の献立すら思い出せまへんのに、どうしても忘れられないものの一つにこの画がはいっているのが不思議といえば不思議でしてなあ。

【ああ… もしも忘れてしまうたらどないしょ、寂しいなあ… 寂しいことを忘れてしまえりゃ僅かばかりの余白さんも、随分と生きやすいんやろうけど、中々そうは問屋も下ろしてくれまへん…】
だって、夢の中まで出てきはるぐらいます。これがほんまの夢殿なんですやろなあ…。

この画を描いてはるお人の姿かたち。下絵を描く鉛筆を走らせる指は、私とこの神棚さんに灯す蠟燭のようにほっそりと白んで見え、しなやかな指がときには神経質そうに、ときには考えることをやめはったようにカンバスのうえ繊細であり、大胆でありと運ばれました。あれが下塗りというものなんですやろか、水に薄っすらと色が着いた程度に暈(ぼ)かしはった絵の具を塗る様子を見えますと、とてもこんなに美しい画になるとは想像も出来しまへんでした。お婆ちゃんなら「お千代、もっと力を入れて墨すらにゃ色はでんよ」いうてゴシゴシやったことですよ。

左手のね、人差し指と薬指に挟んだ煙草をたてはりながら、器用に親指や拳固を握った小指の付け根を使いあって、下塗りの絵具を延ばしていかはる様子は、うちとこの曾孫のお絵描きと変り映えなく思えたものです。

不染(ふせん)鉄(てつ)作・夢殿 完成披露の展示会がこうして法隆寺さんの本堂でおこなわれ、私は幸か不幸かその完成した画を鑑(み)ることが出来ましてんけどなあ。

冥途(めいど)の土産なんていう例えがありますやろ…。

どうでっしやろうなあ〜どっちなんですやろか。この歳まで逝(い)かせてもらえなかったのも、ご褒美だからこの画を鑑てからにしないさなのか、これまで生かされてきたことへの感謝をしないさなのか。この歳になりますとなあ、観音さんの謎かけも有難いやら迷惑やらで、夏の日の昼下がりに隣の酒屋が打ち水しますねんけどな、良かれとおもうてなんやろけど、これが毎度毎度うちとこの前までしてくれはりましたな、そのあとうちとこの店の三和土は決まって泥だらけになりましたん。有難迷惑ちゅうことありますやろ。こんなこというてたら観音さんのバチがあたりそうですわ。なにはともあれ、お陰様でもうなあんも思い残すことなくお迎えを待つことが出来るようになりましたん。



「お千代姉ちゃん、あんたやっぱり来てはったん？ 体の按配(あんばい)はもうええの？ 大事にせにや、あかんよ、あら…今日は、松枝(まつえ)さんも一緒なん？ ほな安心やわ良かったねえ」
「はいな、ありがとねえ…お里ちゃんも元氣そうやね。きょうは亜由美さんも一緒に。まだまだ寒いから、体を冷やさんといてねえ…。お腹のお子にさわったらあかんから」
隣の古道具屋(ふるどうぐや)の古女将(ふるおかみ)、お里も来ていたようです。高々(たかだか)二つほど若い、かぞえて九十二才というだけでこの云いよう。大体、あんた…「やっぱり」ってなんですのん。誰殿彼殿、チョイと名の知れたお人と見ると全部自分のお友達にせにや気のすまん子でしてなあ。

まったくいつまで人のこと姉ちゃん呼ばわりしてはるねん。云うたところで目くそさんが鼻くそさんを笑うようなもの。他人(よそ)様(さま)の心配はさておき、あんたとこの嫁や孫嫁の癩癩(かんしゃく)取りしてあげなはれや。お前さんが未だに商売にも口を出すものだから、嫁も付き添いの孫嫁も癩癩が溜まっていると愚痴をこぼしているのも評判やないの…。

そんなことを考えていますとね、見透かしたようにお里のところの孫嫁は始末の悪そうな顔を見せると会釈をしてみせました。うちの松枝がお里の孫嫁と言葉を交わしはじめた頃合い「ほれ、亜由美はん行くよ。お腹のやや子に何ぞあったらうちが陰口叩かれるわ」と捨て台詞をのこすとスタスタと一人で歩いてゆきます。

ほんまになあ、子供のころからのことやから今さら驚くことでもないねんけどな、このお里の足腰の丈夫さと口の達者さには舌を巻いたものでした。道具屋は、目が利いては商売にならぬの例えがありませんけどなあ、ほんまに上手を云うたもの。

そうそう、むかーしこんな話がありましたんけどな…。

【うちのお店に古着を持ち込んだご近所はんがいはってね、これでなんとか五十銭貸してくれと云わはります。その様子は当時十一、十二歳の私でも分かるほど、何かいつもより居丈高(いたけだか)に映りましたん。

あいな、質草(しちぐさ)もって質屋に行くときちゅうのはな、大かたのお客はんは少しこう… 肩をす

ぼめて暖簾(のれん)をくぐるのが当たり前の風景でしたから、子供ながらに、この人は何をこんなに威張っているのだろうと思ったもの。

店番のお母ちゃんはその人には貸せない。これぐらいで持ってお行きなさい： そういうのですが頑として引き下がりません。お母ちゃんも何かの事情や理由があるのだと思わはったのでしょうか。なんでもそんなに自信があるのか、どう見てもそこらの呉服屋さんの店先もの。そう誂げたのですが：、するとそのお客はんが云わはりましたん。

「ちゃうがなあ、向こう町の古道具屋の前を通りかかったらなあ、あつこのおちびちゃん、お里いうたかいな、ほれが店先に出とってな、偉いなあお手伝いかい云うたら、おっちゃん： この服な買うてって損はないで云いよる。わしがなんでや？ そんなあほなことあるかいな云うたらなあ、あのチンマイ躰(からだ)でチョットこつち来いと手招きしよる。ほしたらわしの耳元にお参りするようにな手を重ねてコチョココ云いはじめたやないかい。

あんな：なんでかうたらなあ、買うてまたそれを売ったらええねん。お千代姉ちゃんのとこやったら、キッチリ値打ち通りにみてくれはるやんか。おっちゃんは買うて損するどころか、儲けがでるちゅう仕組みやねんなく。そう云いよる。これまたハシコイ子やないのよお：。あの年で男衆の急所の掴み方すら心得てけつかる。末恐ろしいガキやでほんま。せやから、買うた値段以上で預かってもらわにやわしゃ損するがな。こんなん持って帰ったところで一人もんのわしにどうせちゅう話しやねん」

なんと売り付けたのはお里だったようです。お客はんはお里のその口上の余りの巧みさと、人たらしの術中にはまってしまったんですやろなあ。

この時、確かお里は満で九つか十ぐらいだったはずです。わたしはお里の逞(たくま)しさに驚き、なんとという利発な子だろうと思つたのもあたり前、末恐ろしくさえ思つたものでした。ただお母ちゃんは違つたようです。この話を聞くや否や、持って帰るかお店の言い値で置いてゆくか、さあ、どつちになさいます： と畳みかけたのでした。

お客はんはその劍幕に驚きはつたんですやろなあ、洪々言い値で預けてお帰りになりはりましたん。右手でこう暖簾をパシッと叩(はた)き、肩をすぼめ、右よし、左よしと出ていかはつた姿は来た時とは対照的にうつりましてん。

お母ちゃんは預かつた質草を前にすると大切そうにブラシを当て綺麗に折りたたみ、虫よけのシヨウノウを挟むと餡色に艶をみせる大きな柳行李(やなぎこくり)に仕舞いながらこういうのでした。

「この行李の中のものには預かりものばかりやけど： 多分引き取りには来ない人たちのものだからね、将来お千代にあげるからね」と。

その行李の横腹には、十二月十二日火の用心と墨で書かれた短冊がポロポロになりながら張り付いてましてん：。

お母(かあ)はん、あんなあ：あのおっちゃんがお里ちゃんから買(こ)うたと分かつたとき、お母はん怒りはつたやろ。なんで怒つたん？ 私がそう云いますと母は：

「お千代な覚えておくんやで、お商売でもそうやし友達関係や人間関係、この世の関わりの凡てはな、善敗己に由るいいましてな自分で自分の人生の責任を取らないとあきまへん。他人様を巻き込んで責任を擦り付けるようなことをしてはあかんのや。ほしたらな、お客はんとの間で何か行き違いがあつて喧嘩になつても当人同士で解決できますやろう？」

でもな、他人様を巻き込むと問題はどんどん複雑に大きゅうなつてゆく。因果応報やねえ。あのお客はんはきつとお里ちゃんどこに文句を云いに行かはるやろなあ…、話しがちゃうやないかい云つて…。それとな何度も口を酸っぱくして云うてるけどな、うちとこのお商売は口の固さが何よりも大切なんや。お千代は毎日ご飯を食べはりますなあ。ええか、ご飯の半分は口の固さのお陰やと思うとくんやで。質屋の暖簾をくぐるお客はなんてな、好きでくぐるお人はいてしまへん。みんな大なり小なりの事情を抱えてくぐりはるねん。前にも教えましたやろ。道端でお客はんに会つてもうちらから挨拶はしたらアカンて。お千代はなんでもか覚えてはる？ そや、うちとこのお商売はな、顔さしまんのや。せやからお客はんはに迷惑かからんようにわざと知らん振りせにゃあならんねん。お里ちゃんはな、確かにはしこい子なんやろなあ。でもな、お利口さんかどうかは分からんなあ」

「善因善果、悪因悪果、自因自果ちゅうこつちゃね」私がさういふと「お婆ちゃんに感謝しにゃあならんね」そう云いながら笑つて見せたものでした」

何ですやろなあ。そんなことを想うと知らぬうちに懐かしくて頬と口元が緩みますねんなあ。それにしても…お里の内緒話しは昔から手をこうして合わせはつてからお参りするように耳元に近づけ、キュツとこう菱餅さんのようにするのが癖でしたなあ。

せやけど私に内緒話しをしたことは、あんた…一度も無かつたわなあ。



「お義母(かあ)さん、しんどいことあらしまへんか。少し座つて休みはつたらどうですか？」次男の嫁の松枝が私の手を取りながら声かけてくれます。

「うん。大丈夫よ。もう少しだけお前の体を掴(つか)ませたつてな…、もうちょっと鑑(かん)でいたいから…」

「はいはい、じゃあこの腰のベルトの処を掴んで下さいな…」コートの裾をまくり上げると松枝は、むき出しになったベルトに私の手を掴んで導くのでした。

私と歩く松枝は踵(かかと)の高い靴を履く処を見たことはありません。いつも、踏ん張りの利きそうなペタンコの靴ばかり。そして立つときはお相撲さんのように股を開いて踏ん張るのです。

その姿は、新婚旅行で行った高知桂浜の土佐(とさ)犬(いぬ)さんの土俵入りのようでしたから、掴まらしてもろてる私は、随分可笑しいやら申し訳ないやらの思いで眺めるのが常でした。

「松枝はん、あんた幾つになりはつたん？」

「何ですの急に」松枝はさういふと口に手を当てながらワツハハと大笑い。

人目も憚らずという言葉がありますやろ。私は松枝のチョイと後ろから手綱(たづな)を掴んでいましたから、傍(はた)から見ればそれはさぞかし面妖な光景でしたやろうなあ。私達の横を通り過ぎていかはる招待客の皆はんが、その光景を眺めニコニコしながら頭を下げていかはります。

私は松枝の手綱を握ったままそれをグイグイと左右に振り、声を潜めて「チョット、松枝はん、笑い声が大きんとちゃうの、もう少し声を落とさなはれ。みんな見ていかはるから」

通り過ぎてゆくお人の殆どが顔馴染みいますか、お知り合いみたいなたちばかり。中には心やすく声を掛けていかはるお人もいてはりました。会場のあちらこちらでお辞儀が大流行りです。画を愛でる会ですから言うまでもなくみんなお喋りは小声です。

そこに土佐犬さんよろしく踏ん張りをきかせた松枝。

後ろから手綱を引き締めた強力(ごうりき)の私。

手綱(たづな)を横に振る姿はまるで犬を落ち着かせるための仕草にも見えたかもしれまへん。

「お義母(かあ)さん… あんまり横に振るとお腹の皮が擦れて痛いですよん」というと口を尖らせ斜めうしろの私を見ました。すると、また噴き出して笑いはじめたのです。余程、私の顔が恥ずかしそうにしていたのですやろなあ「はいはい、ごめんごめん」というと、松枝は正面に向き直り「ちょっと前に六十三になりました… あっ、満でね、満で」というのでした。「ほな、数えでいうたら…」私がそこまですうと、松枝は「はいはい、六十五です」と先にまわっているのです。

「お義母さんのその癖は治りしまへんなあ…」松枝は優しそうな笑顔を見せると振り返りながらそういうのでした。

「せやなあ… 以前なら自分の歳いうときは満でしかいわんかったけど、人の歳聞いたあと必ず満か数えか確認するものなあ…」

「そうそう… でもね、その気持ち、私も分かるようになってきましたわ」

「そうですやろ… そうなってますねんて… 私、観音さんにも歳聞くとと思うわ…」

「お義母さんのことやから、きつと、数えで教えてやって云いはるんでしようなあ…」

松枝はそういうと首をすくめてみせるのでした。

「ところでお義母さん。お義母さんは幾つになりましたん？」

「松枝はん、あんたまた私のポケ具合を確認してまんのかいな。私に歳訊くちゅうのはな、観音さんに歳訊くことと一緒に教えてましたやろ。人に云うたら値打ちがのうなりますねん」

「安心やわあ」「何が安心やの……」

「だつてなあ、お義母さんちゃんと毎度同じ返事をしてくれはりますやろ。私にとってはこれほど安心なことがありますかいな。お義母はんはまだまだ元氣や。ここ、しっかり掴まっといってくださいねえ」そう云うと、湯たんぼはんみたいに温かな手を私の手に重ねてくるのでした。

次男の雄介は四十八歳の年(とし)に労咳(ろうがい)を患い早逝。二十歳の長男を頭(かしら)に十七歳の次男、十五歳の長女と残したままに鬼籍に記されてしまった。親より先に逝くとはなんと親不孝… そうも思ったものです。せやけど一番しんどい思いをしたのは嫁の松枝ですやろなあ。

子供三人を抱えて松枝も悩んだ時期もあったようで、しばらくは夜になると一人泣きしていたのでしよう、朝には泣き腫らした目を伏せながら、子供たちの準備をする姿が見られたものでした。突然残され、まるで放り出されたように、何から何まで自分でやらなければならなくなりました。家業の質屋は早逝した雄介が継いでくれましたから、松枝は嫁に嫁いできていたものの雄介が他界したあととはやはり

心細かったんですやろう。

しばらくはかける言葉にも苦慮したものだ。それでも孫三人も、今ではみんな立派な釜戸（かまど）持（も）ち。その中の長女が家に残り、入り婿を取ってくれたのでした。

そんな私もなあ、早くに戦争で良人（おっと）を盗られてましたから松枝の寂しい気持ちや大変さは痛いほどわかったものでした。

あのなあ：誰が云うたか知りまへんけどなあ、ももひぎ三年しり八年云うてねえ、女子（おなご）ちゅうもんはなあ、後家はんになってからも腿や膝に旦那の温もりを思い出しながら泣く日々は三年にもおおよぶうでしてな、尻にあっては忘れるまでには八年もの時間が必要やちゅうんねんから、そりゃあ松枝も寂しかったですやろうなあ。さっさと十八年も経ってくれたらこっちのもんなんやろけど。割れ鍋にも綴じ蓋いうて、どんな鍋にもそれなりの蓋はあった方がいろいろ都合も宜しいんやろうけど。自分たちの家の中で、男はんに先立たれ、残された者を見るちゅうのんは不憫でかないしまへん。

それにしても昔の人はえらい粋なことを云うたものでしたなあ。でもなあ、ももひぎ三年しり八年てな、きつと考えはったんは男はんなんやろねえ。これまた女子（おなご）の業ちゅうもんをキツチリ知ってはたら、こんな三年だ八年だなんて云えますかいな。ねえ……観音はん、堪忍したってやあ。

その二 錫(すず)メッキのブリキ缶

この画を眺めているとねえ、描いてはった情景までも思い浮かべることが出来ますねん。それは去年の秋のこと… 昭和四十一年の九月も半ばを過ぎた頃…。

毎年のことやけどなあ、斑鳩の地を濡らす秋の長雨は夢殿さんを朧(おぼろ)の中に包み込みますねん。伽藍周辺さえもけぶるようになります。

境内に敷き詰められた玉石は水にふやかした黒豆さんの様子を見せながら、伽藍の一部になったようにピクリともしまへん。涅(くり)色(いろ)いうんですやろか。中秋の柔らかな陽ざしさえあれば、白地に薄く藍を溶かし込んだ石の姿は訪れる参詣者の足元に心地よい旋律を奏で響かせるに一役買ったことでしたやろう。

さながら天と地が繋がった合図を想わせるようで、雨をおとすお空も同じ色を見せています。それは黒豆さんをふやかした後の水で塗りつぶしたようですねん。

太く、切れ目なく墮ちる雨垂れは、吉野の平宗(ひらむね)さんの葛(くず)きりを、お空から突き出したようにみえ、それは救世観音菩薩の功德の顕しのようにも思へ、数多(あまた)患(あ)い事(わざ)らしいことからの救済を試みる蜘蛛の糸にも見えるようで、時には下から上へ降っているようでもあり、昇(あ)りてゆくようでもありと映ったものでした。

まるで足元から踏み板を外されたようで、心細く頼りなくも感じられましたん。

「お千代。さて、この先どうする。進んでみるもよし、退いてみるもよし」と突きつけられてもいるようで、些(ち)かハツとさせられたものでした。

【ああ… 何でしょう、思い出したら平宗さんの葛きりが食べたくなってきましたよ。こんな歳になっても食べたいは衰え知らぬものなんですやろか。ああ… 今夜の夕餉は平宗さんの柿の葉寿司にしましょうか。松枝と帰りに買ってゆきましょうか…】

私が法隆寺さんにお参りに来るようになってから幾度の秋を迎え送ったことですよ。秋雨に眺め入ると現(うつ)つと夢を行き来するようで些(い)さ(さ)か心もとないねんなあ。

地面から浮かび上がった雨水が境内に敷かれた玉石の隙間を埋めます。雨は間断なく木立や伽藍、地を打つものの境内を取り巻く仏性が幸いしているのでしよう静寂に馴染みをみせてはります。

今また一人の老男がいつもの様に長靴を履き、纏わり(まとわり)憑(つく)く雨水すら慈(あ)しむように足を小さく出しながら伽藍むこうへやってきました。

この御仁、名を不染鉄というそうで、どうやら画描(えかき)を生業(なりわい)とするのか、足しげく通い来ては法隆寺さんや夢殿さんの画を描いてはったようです。境内で顔を合わせるようになってから既に四十年も経ちましたか。毎日毎日、雨の日も風の日も片道一里半(6キロ)の道のりを歩いて通(か

よ)ってはったようです。

鉄さんは足元に目をやるや、足でそっと玉石を転がしながら弄(もてあそび)はじめました。コロン、コロン、カチン、転げた玉石はぶつかり合いながら明後日(あさって)の方角に転げてゆきます。何やら生きているようでもあり、あらぬ方向へと転げる様子は人の一生を見せられているようにも思えたものです。

雨の中、傘を持つ手が足の動きに呼応をみせ、時折大きく右へ左へと揺れをみせはります。踊っているようにも見え、踊らされているようにも見えましてん。その姿が寂しそうでなあ。きつと鉄さんは秋が好きなんやろうなあ。人目を気にせず存分に泣けるから秋の雨模様が好きなんやろうなあ…。そう思ったものでした。

でもなあ、不思議なお人でなあ、境内を歩くときは傘のかかる範囲にしか足を運ばず、静かに歩きはるんやけどな、手を合わせるわけでもなく。お勤めをするでもない、ましてや何かを願うわけでもなく、ただひたすらと傘を手に地面に目を落とし、むこう(…)に佇みはってねえ、哭くでもなけりや憤るわけでもなく、粗忽を見せるわけでもない。それが按配寂しそうで寂しそうでなあ…。

中にはな、博打にでも行くんですやろなあ、何人かで連れ立って来ては賽銭箱に乱暴に賽銭を放らはって柏手を打つ埒(らち)なき男衆も見ることが出来ましたからなあ…。

しばらく見かけぬなと思へば、長野に行っていたと善行寺土産を私とこのお店まで届けてくれる心優しきお人でした…。私が数年前に大病を患ってからのというもの、顔を合わせるたびに私を気遣い声をかけてくれるのですが、どうにも私よりも鉄さんの方が儂(はかな)げな按配を感じさせたものでした。

聞く処によると、東京小石川(現在の文京区)にある浄土宗の寺、光円寺の住職の倅(こ)ということではあったものの、そのくせ背筋のシャンとしたところは覗えず、とても仏の道と近いとは思えませんでしたなあ。ところが人は見てくれではわからないもの。話は聞いてみなければわからぬもの。なんでも昭和のはじめ頃には僧侶になるための検定試験である、律師なる試験も修めっていると聞かされたのには随分驚かされたものでした。

第二次大戦後の混乱期には女学校の校長も務めていたようで、とき折、地元の女学生数名を従えてお参りする姿を見受けたものの、境内で私を見つけた途端、その気配、引率からは甚だ遠く俯き加減に歩く様子からは、引率されている気恥ずかしさが滲んで見えたものでした。

「よう降りますなあ…」

「はい。本当に…」

どうということもない当たり前の挨拶が毎度のこと交わされます。

鉄さんは風呂敷包を開くと道具箱を取り出し、雨のかからないところにイーゼルを立てます。そこに古新聞で何重にも挟み込んだ絵絹のキャンバスを開くと鉛筆で下画を描き始めました。粗末な空き缶を降りしきる雨の下に何個か並べますと、立ちどころに仏性がかき消され缶を打ち付ける雨音が広がります。缶の大きさがそれぞれ違うせいなんですやろなあ。凡ての缶から流れる音が違いました。それはまるで声明(しょうみょう)のように境内に響いたものでした。

【あ…、かき消されたと思った仏さんの声は姿を変えただけなのだ、缶を打つ雨音さえ愛おしく思えるのは、観音さんの成せる御業(みわざ)なんですよな…】

目を閉じてその音を聞いてますと、水琴窟(みづきん)うのがありますやろ。井戸のような蹲踞(つくばい)の小さな隙間に耳を寄せますと、一滴、一滴おちる水滴が仏さんの内緒話を聞いている様に心落ち着く音が優しく響きます。お里の内緒話もお人によっては水琴窟みたいなもんかもしれまへんなあ…。

カン、キン、コン、カチャ、ヒチャ…缶の中に水がほどほど溜まりだすと音が止みはじめます。

雨のかからない庇(ひさし)の張り出した下、鉄さんは夢殿を描いてはりました。

「いやあ… これはやはり描きにくいなあ… カンバスが湿気を吸って鉛筆が走らない」
誰に云うとは無く鉄さんが肩を落として呟きます。

「下色だけ入れておくとするか…」

雨を受けていた空き缶を軒下に運び込むと、三十分も経っていないのに一番小さな缶には水が溢れんばかりに溜まってはりました。

「随分溜まりはったね… お水…」

「そうですね。チョット薄めすぎですが、まあ、下塗りなのでやれるでしょう。全体の雰囲気は顕すだけですから」鉄さんがはにかんだ笑顔を見せ答えます。

「あら、鉄さん、絵の具は入れしまへんの？」鉄さんは四つの缶にそれぞれ絵筆を放り込むと、グルグル水をかき混ぜてはったのです。

「荷物になるし雨が降っていますからね、絵の具チューブをダメにしては大変なので、予め缶の中に絵の具を塗りつけて乾かしておいたんですよ」

水がたまった四つの缶は、一つの缶を除いてどれも同じように黒豆さんをふやかした水のように薄黒く見えているのです。

「歳のせいやろか、目も弱わなってどれも同じ色に見えるんやけど、鉄さんに違いはわかりはるの？」鉄さんはニコリとすると、缶の側面を指さし「ほら、お千代さん、ここ見えますか？」と云いました。

杖を頼りにチョイと前屈みになり眺め観ますと、缶の側面は「赤」「黒」「青」「白」と、釘か何かの鋭利なもので彫られているのが判りました。

銀色の缶の肌が少し錆びつき、所々茶色くザラついて見えてましな。そこに傷つけられたところだけがピカピカと金彩を放って観えました。

「鉄さん… ごめんなさいね、うるさくて。白っぽいお水は缶の横腹に白って彫ってありますけど、これも下塗りに使いはるの？」

「使いますよ…今日は雨が強いですからキャンバスが湿気を吸っているので判り難いですが… 半乾きの処にポツポツと白を置くと滲(にじ)みや暈(ぼか)しが花火のように広がるんです」

鉄さんは嫌な顔を一つも見せず、この歳よりの質問に機嫌よく答えてくれるのでした。

「なんだか綺麗ですねえ… 缶の彫ったところだけがピカピカ光ってありますねえ…」

「今では珍しくなりましたからね、錫(すず)メッキのブリキの缶は…」

「錫メッキのブリキ缶ですか… そんなものがあるの…」

そこまで云って、私は思い出しましたよ…私は錫メッキを知っていたのです…。



私が十三、四のころでしたか、その日の店番はお婆ちゃんのウネがしてましてな。

「お千代、茶の間の戸棚の上から二番目の引き出しを開けておくれ…そうそう、そこを開けるとね、鉄なんかがあるだろ？」

祖母の云う通りに戸棚を開けると、そこには裁縫道具の針や糸、そして鋏やら籠手などが几帳面に整然となおされて(……)いました。

「そこに針が引っ付いた、まあるい平べったい石みたいなものがあるかい？」

「うん。ある…」

「その針箱に針を外して入れたらそのまあるいのをこっちに持って来ておくれ」

そこには確かに針が引っ付いたまま散らばることのない、まあるい平べったい石のような物がありました。針を外しお店のお婆ちゃんのもとへ持ってゆくと、西洋風の立派な身なりをし、口ひげをたくわえたおじさんが立ってまりました。

「はい、ありがとさん…」

私は何が始まるのかと好奇心が抑えられず、店の番頭席を離れることが出来ずにお婆ちゃんの手元を正座をしながら凝視するのです。

ふと目をお客さんのひざ元の上がり框(あがりかまち)に移すと、そこには綺麗に銀色に輝く「茶道具一式」が整然と並べられていました。

【綺麗… おてんとうさまの光を受けてピカピカ光ってはるわあ】
とも箱もあり、筆字で箱書きが書いてあるところを見た私は、なにか途轍もないお宝が持ち込まれたと思っただけです。

お婆ちゃんは平べったいまあるい石の玉を自分の前に置くと、急須を手に取りそのまあるい石のようなものの上にかざしました。

「カチン！」

するとどうでしょう。その平べったい石の玉は急須に飛びつくように張り付いたのです。

「あちゃああ… あかんかあ…」

「あきまへんかあ…」

声を発したのは祖母とおじさんが同時でした。

私はその光景を見ていて何のことか皆目でした。なにがどうなっているのか、なにがあかんのかが気になって仕方がありません。せやけどね、そのお客さんの落胆の様子を見ると、その場でお婆ちゃんに聞くことが躊躇(ためら)われたのです。

「お千代、これを元あった場所に戻しておいてちょうだい」

その言い方からは、戻したらお店には戻ってくるなという調子が感じられました。程なくすると、お店から呼ぶ声が聞こえてきました。

「お千代、さっきの石の玉を持っておいで……」

「はい」私はこの瞬間が大好きでしてな、祖母や母はことある毎に新しい知恵を授けてくれました。

「お千代、これはな、磁石云うてな、鉄とても仲がええねん」

そういうと、先ほどのお客さんが置いていかはった急須に近づけると、それは祖母の指先から飛び出すように急須に張り付いたのでした。

「お婆ちゃん、私もやってみよう……」

「よしよし、ほなな、こうして下に置いて……こうして急須を近づけてみなはれ」

質草に傷がつくことを懸念したのでしよう。急須の底をかざすことしか許してはくれませんでした。

「……せやけどな、この磁石っちゅうもんはな、値打ちの高いもんとの相性は良くないねん。せやから金や銀との相性は今ひとつ、ちゅうこつちやな……。ほれ、そこからその簪(かんざし)を持って来てごらん、幾つか並んでる箱がありますやろ……そうそう、それをここへ……」

箱をお婆ちゃんの前に届けると、その磁石というものを簪の上にかざしはじめました。

「これは銀やな……これは鉄、これはええもんやねえ……金細工や……」

そう云いながら磁石をかざして真贋の見立てを教えてくださいました。

「さっきのお客さんのこれはなんやの？　磁石が引っ付いたちゅうことは鉄なんやろう？　なんで

こんなにピカピカ光って綺麗なん？」

「錫(すず)メッキいうてな、鉄の上から錫でメッキをかけてはるねん……せやから、磁石が吸いついてしもうたんやな……」

そういうと簪の並んでいる箱から金細工の施された簪を取ると、私の潰し島田に足りない結髪(ゆいがみ)に刺しながら……

「お千代な覚えておきなはれや。人の相性云うもんはな、得てして磁石みたいなもんと思いうて惹きつけられるもんを有難く思いがちやけどな、そうやないで……結局は目を養わなあかん。澄んだ目をもちなはれや……。お千代が金や銀のように値打ちの高い人間になれば、磁石は寄ってきいへんから安心やけどな……」
そう言いながら優しく笑うのでした。

あの簪がお婆ちゃんの形見となるまでに、それほど時間はかかりませんでしたなあ。

あら……鉄さん……そういうたらあんたも鉄やないの、ほな、私が磁石かい？　あんたが引き寄せるんだか、私が引き寄せられるんだか……どちらにしても引っ付きたがるんやろうなあ……あんたも私も大事な人を早くに見送ってるから……なんや他人ごっちゃうねんやろなあ……きつと……。

その三 鉄さんの憂鬱

「お義母さん、大丈夫ですか？ しんどいんじゃないですか？ 無理しんど休んでくださいねえ」嫁の松枝がよう面倒みてくれはりましてえ、私もこうして鉄さんの描いた画を眺めに来ることができまして。それはもう本当に有難いことですわ。

「松枝はん、ゴメンねえ… いつもこうして擱まらしてもろて。あんた大丈夫か？ 重たいことあらしまへんか？」

「何いうてますのん。手綱引いてもろてるだけですやんか。なんもしんどいことありません。あつ、お義母さん、いい席が空きましたで。あそこに座って眺めさしてもらいましょ」
不思議なものです。こういう時は足がこう：シャシャシャいうて動きますねん。丁度面の正面。少し距離はありましたけど、座ってみることが出来るベンチシートが空きました。

「あゝ これはいい按配だねえ。これで少しは落ち着いてみられそうやねえ」そういいながら松枝を眺め観ると、私が擱まっていた腰回りのゴタゴタを直しておりました。

鉄さんの描かあった夢殿さんは、秋の長雨の中に佇む夢殿さんを描かあったものなんやけどね、太い雨が幾筋も幾筋も画面いっぱい垂れ落ちてましてなあ… それが寂しそうに見えるのです。ただね、扉障子にほんの少しだけ、中からの明かりが挿してましてな、その明かりがそりゃ可愛らしゅうて、可愛らしゅうて…。

「ああ… あの明かりは鉄さんの魂なんやろなあ… 早くに奥さんなくしてはって、寂しい気持ちを顕した鉄さんの魂なんやろなあ」そう思えたものでした。
夢殿さんの南の空には雲を割るように横一条の光明が射してましてな、それがまた打ち立ての真綿のように柔らかでやさしい光でした。

せやけどな私この画の本当の秘密をみつけてましてん。あんな、涅(くろ)り(色)いろ(色)やら黒豆さんをふやかした色やらの暗い色ありますやろほれな、凡てが銀色ですねん。丁寧に細かめに銀を挿してますねん。暗い銀、明るい銀、青みがかった銀… 色々な銀をな。

雨はなあ、金色ですねん。薄くて分らしまへんけどな、鑑る角度を変えてなあ斜め横から鑑るとな夢殿はんを打ち付ける雨や、画面いっぱい広がると雨が金挿しで描かれていますねん。こちらが座るベンチシートから眺めただけではわかりしまへんねん。水墨画に見紛うかもしれまへん。不思議な画なんですわ。

「松枝はん… いい画やねえ私この画を鑑ているとなんか泣けてきますわ。ねえ？」

「お義母さんは鉄さん鼻屑やからねえ私なんかこの画を観てると、葛きり思い出しましてん(笑)」

はあ： なんや葛きり食べとうなってますわ」

私は吃驚しましたよ。この子に読まれたんちゃうやろか思うて。

「松枝はん： あんたなあ： 似てきはったねえ」

「誰にですのん？」

「私にやないの、私もな、さっき平宗さんの葛きり思い出しましてん」

「お義母さん： ほな、帰りに食べて帰りましょ。晩ごはんは柿の葉寿司をこうて帰りましょ」

長いこと一つ屋根の下、苦楽を共にして来たお蔭でしょうか、観音さんの粹なお計らいでしょうか。考えることは寸分違わずを思わせませす。

「そうそう： たしか家に鉄さんの画が一枚だけありましたなあ：、富士山を描かはった立派な画。お義母さんあの画はどこに直しましたん？」もう二十年以上前に鉄さんから私が買った画のことを松枝は思い出したようです。

「あのな、私の柳行李わかるか？ そうそう： あの柳行李や。なに云うてますのん、捨てますかいな。お婆ちゃん化けて出てくるわ。私の部屋の押し入れにちゃあんとはいっているから： あんたあ、ちゃんと引き継いだってなああの画。行李？ 行李か。行李はもうええから私が逝ったら細かあに崩して捨ててしまいはなれ。中に入っているものは全部あんたにあげるけどな、せやけどあれや：：あの風呂敷で包んだらんまい茶箱だけはあかん。あれたげは風呂敷きほいてもあかんし、茶箱を開けるのはもってのほかや。あれはあのまま棺桶に入れて一緒に焼いてくれなはれ。あれだけはな：： 他はなあーんもいらへん」

「はいはい。風呂敷包みのことはようとわかってます」ほういうと松枝は私の隣に座りながら足を優しくさすってくれます。

人の手ってな：、なんでこうして温かくて柔らかいんですやろ：。

私は孫やらひ孫やらそしてこの松枝やら：、たくさんの温かくて柔らかい手に囲まれて過ごせますけどな、鉄さんを想うとねえ。自分の手しかあらしまへんやろ： なんぼお坊様の修業したゆうても、そりゃあここまで寂しかったですやろなあ：。



「ごめん下さい：、ごめん下さい」

「はあい：、おや、鉄さん。どないしはりましたのこんな寒い日に」

今から二十年以上前： 昭和二十年の師走も半ば。鉄さんがうちの店を訪ねて来ましてん。最初に対応に出たのは早くに逝去した次男の嫁の松枝でした。

「やあ、松枝さん。ご無沙汰します。面目ない。じつは年末を迎えるに窮してしまい、ついでに画を一枚かたに預かってもらえぬものかと：」

「わかりました。ほな、お義母さん呼びますからチョットだけまっってくださいねえ」

松枝が奥の私の部屋に来るや早口で仔細を告げるのを聞くと、私は「ありがとう」と一言発しお店まで転げるように出てゆきました。シャシャシャシャ：いうてなあ。

「鉄さん、寒いところわざわざ来てくれて有り難う。なんか松枝の話では画を一枚預かって欲しいと

か：」取り次いだ松枝は店に顔を出しません。このあたりは本当によくできた嫁でした。

「お千代さん、面目ない。恥を忍んでなのですが、この年の瀬、なんとも窮してしまい、無理を承知でお訪ねしました」

さぞや居心地が悪かったのでしょう。鉄さんは正月用に番頭席に飾ったご生花の藜蘆（おもと）に鈴なる実のように、顔を赤く染めながらそういうのでした。

「鉄さん： 私とこのお商売は値打ちがはつきりついているものにはしかお貸しすることは出来しまへんね。せやから、美術品や工芸品という文化的価値を評価する物差しは恥ずかしながら持ってませんね。まずそこを許したって下さいねえ」

「そうですかあ：」鉄さんは肩を落としてはりました。

「でもね鉄さん：、もしも鉄さんが良ければ私がその画を買わしてもらいましょ」

「ええっ！ 買ってくれるのですか、私の画を」

「お友達の画を一枚買うぐらいがなんですの：チョット遅いぐらいですわ。はい、ほななんぼで買わしてもろたらええのんやろね」

鉄さんはモジモジしてました。言いくそうにモジモジと下を向いて。意を決したように一層赤く染めたお顔をあげると：

「では、お千代さんの好意に甘えて八百円で：、いや七百円で：」

「珍しいお人やなあ（笑）」

「はあ：」

「うちとこ来るお人は皆だんだんに高向（たこう）なっていかなるのに： 鉄さんは安うなっていかなる： そんなお人聞いたことありまへんわ（笑） わかりました。ほな、これで買わしてもらいましょ」

私が番頭席の上に用意したお金は「千五百円」でした。これでも高いか安いかわかりません。ただ七
百円、八百円はギリギリですやろ。年の瀬を迎えるに窮しての七百元：、ほな新年を迎えるには足ら
しまへんなあ。私はそう云いながら鉄さんの手に千五百円を握らせました。

「お千代さん：、あなた画をまだ鑑てないではないですか。鑑てからには如何ですか」

「鉄さんがお客はんなら、勿論みさせてもらいます。せやけど鉄さんはお友達です。私はお友達の画を買わしてもらただけ。その風呂敷に包まれた画は、あとでゆっくりみさせてもらいます：、松枝はーん、はいな悪いけどね、あったかーいお茶を一杯いれてここまで持って来てくれるか。ほして、この包みを仏間へ持って置いておいてな：」

「あんなあお千代。よく覚えておくんやで。お商売先からものを買うときはな、絶対に値切ったらあかん。びた一文たりとも値切ったらあかん。」祖母のうねの教えでしてん。

「でも： みんな闇市で買い物するときに、まけてくれまれてくれていいはるよね」

「そや。でもな、うちとこのお商売はな逆なんや。もっとくれ、もっと貸してくれ云われるやろ？」

「うん： 皆言うなあ」

「仏さんが教えてくれる世界にはな、餓鬼道ちゅう世界があつてな、この世界はとにかくもつと、もつと、もつと、もつとというて欲しがる世界でな、もつとまける、もつと高く…、それはそれは欲のキリのない世界なんや」

「お婆ちゃん…、私もなあお母はんの時々言うてるわあ…、もつとお飴さん頂戴て…」

「ほうか…、ほしたらなあお千代、お母はんにお飴さんもろたらな、今度はもつと頂戴って云わんときや。ほしてなあお爺ちゃんのところへ行つてな、お飴さん頂戴て云うてみ。きつとお爺ちゃんもくれるから。ほしたらお千代、倍に増えるやろ。お飴さん。ほしたら誰からも小言いわれんですみますやろ」

「ほな、お婆ちゃんにお飴さん頂戴云うたら、私…、大儲けやね(笑)」

「あかん…、この手はお婆ちゃんには通用しまへん(笑)…」

「ええか、闇市で買うものいうたらな、大概値段ははつきりしてるもんが多い。高かろうが安かろうが高々知れたものや。要はお商売先の儲けちゅうこつちやな。だから値切つたらあかんのや。私らが値切らずに買い物したらな、お商売先がうちの質屋に来た時に、もつとくれ、もつと出してくれ…云えんくなるやろ。人様の声いうもんは千里を走るいうてな、ほれがお商売の評判ちゅうもんになるねん。せやからな、まけてくれとは言うべからずが鉄則なんや」

事実、祖母が買い物先でまけてくれという言葉を使ったところは見たことがありませんでしたなあ。逆にうちとこのお店にきはったお客はんは、みな、祖母の顔を見るとあきらめたように自分で金額をいうこともなく、祖母が提示したお金をもって帰りはりました。

昭和二十一年正月の松もまだとれぬ頃… 鉄さんからの年賀状が届きましてなあ。

ハガキの裏には朗々とした感謝の言葉と共に縁起物の画が微に入り細にわたって描き込まれてました。

「お義母さん、大切に… 画と一緒に直しておきましょうか。将来、もつと(…)値打ちが出るかもしれまへんから(笑)」松枝が楽しそうに言葉にしました。その年から年に二度、鉄さんからのハガキが届くようになりました。私が鉄さんの画の秘密に気が付いたのはこのハガキの画を観るようになってからでしたなあ…。

その四 鉄さんの秘密

昭和三十六年の夏の日でした。この歳の夏はそりゃあ暑い日が続きましたなあ。夏入り前の梅雨が空梅雨でしたから奈良県全域に渇水警報いうもんがでましてな、取水制限いうですよるか、お天道様の高い時間帯になると水道が止まってしまっって、そりゃあ往生したものでした。

そんな七月の三十日も間近のころだったと思います。松枝が嬉しそうに声を弾ませて私の部屋までハガキを届けてくれました。

「お義母さん、鉄さんから暑中見舞いが届きましたよ。また可愛らしい小さな家がたくさん描かれた絵ハガキ。こんな小さな家をようもこんなにたくさん描けましたなあ、鉄さん」

「ほうかあ、どれ、松枝はん、ちよつとその虫眼鏡取ってくれるか。はい、ありがとさん。どれどれ……、松枝はん……、あんた、これ家か？ 私には黒ゴマさん潰したようにしか見えしまへんわ。ようまあこんな小さい家をたくさん描きはったなあ」

「でも、やっぱりあれですねえ、本職の画家さんだけあって上手ですねえ」

「ほうかあ？ そういうもんかいねえ」

この頃の私は目がよく見えなくなっていたこともあり、チョットボケも入ってきていたんでしようなあ、松枝のいうことも分かったような分からぬようなおかしな按配になってきてましてなあ。

「松枝はん……、悪いけど押し入れから柳行李をだしてくれるか」

「はいはい、行李の中の絵ハガキが入ったお煎餅の箱ですよ」

「そうそう、はいありがとう」わたしはそう云うと箱を開けて中に直しておいたハガキを出して手に取りました。

手にした虫眼鏡で一枚一枚の絵ハガキを眺めはじめたものでした。するとそばで見ていた松枝が云うのです。

「お義母さん、鉄さんの画って風景とか景色が多いなあ……、まあ、季節の挨拶やから当たり前かもしれないけど」と。

わたしは云われて改めてまじまじとその絵ハガキを見ました。

わたしはその鉄さんから送られて来た三十枚ほどの絵ハガキを手にながら泣いてしまっていたのです。

「お義母はん、どうしはったんですか、具合でも悪いんちゃいますの？ あきまへん、チョット横んなりはった方がええんちゃいます？」松枝は一生懸命に気にかけてくれましたよ、一生懸命にわたしの背中をさすってくれてましたんけどなあ……。

「松枝はん……、鉄さんなあ……、寂しいねん。あの人な寂しいんよ……」私はハガキを手にしたままオイオイと泣いてしまっていたのです。

驚いたのは松枝だったでしょう。何も言わずに私の背中をポンポンと優しくはたき、さすってくれて

いました。

鉄さんからのハガキに描かれた画のすべてに私は秘密を見つけたのです。

そりゃあねえ、普通にご挨拶を交わすだけのご縁のお人でしたら私もそこまでは感じなかったかもしれまへんなあ。

せやけどね、鉄さんとは仏さんや観音様が取り持ってくれたご縁。わたしがもう少しシャンとしてたら店を松枝に任せたまま鉄さんの面倒を見に転がり込んでたかもしれまへんなあ……。



むかあしむかーしなあ、私が尋常小学校から高等小学校に上がった年でしたから、そう一年生でしたやろか、せやから十歳の時でしたわ…。

「ぐーにーはん、ぐーにーはん、お千代のあだ名はぐーにーはん」

ある日を境に、突然降って湧いたように私にあだ名が付けられましてん。最初は私も何のことかわかりしまへんでした。それが毎日毎日、来る日も来る日も云われるようになりましてなあ。

ある日、学校から帰り祖母のウネに「おカアはんは？」と尋ねると買物行ってるいわはりましてなあ、なんか私、急に寂しいなってお婆ちゃんの膝に突っ伏して泣いたんですわ。驚いたんですやろなあ「どしたん？ 学校でなんかあったか？」そう優しく聞いてくれました。

私は泣きながら言葉にしたものです。

「お婆あちゃん……、あんな、学校でなあ、みんながぐーにーはん、ぐーにーはん云うねん。ぐーにーはんって、なんやろか？」ほうしますとな、お婆ちゃんは大きな声で笑い出しましてん。私はなんやピツクリしてしまいましてなあ。

なんや面白い漫談か何かのことかもしれへん思うたぐらいました。ほうするとお婆ちゃんは急に真面目な顔になると…。

「いいかお千代、今から云うことよう聞くんやで。これからなお千代が大きゅうなつてくわな、するとな、いろんな知恵がついてくる。ほしてな、周りの人間達からかけられる言葉はもつと厳しゅうなる。言葉が無ければもつと厳しい、そりゃあ恐ろしい態度を取られることもある。ええか、負けたらあかん。せやけどなお婆あちゃんという負けたらあかんちゅうのは、喧嘩をせつちゅうこつちやないで。大人の言葉にな、臍を噛むいうてな、どうにもならない悔しさを顕した言葉があるんや」

「ほぞ？ ほぞつてなんやの？」私がそう聞きますとなあ、私のお腹のおへそをチョンチョンとつくと「ここやがな、お臍さんや」というのでした。

「お千代、おまえさんは自分で自分のお臍を噛むことが出来ますかな。……そうや、できしまへんやろ。噛めない臍を噛みたくなるほどの悔しい気持ち。それを大人たちは臍を噛む云うてますのんや。でもなお千代。噛むのは臍やないで。唇や。それもなあんたの心の唇や。うちこのお商売はなあ、お金を借りてくれるお人がお客はんや。ええこと教えてやろか、お千代がなあ大きゅうなった時にな、必ず必ず見たことあるお人が、ほれあの暖簾をかき分けて入ってくる。必ずや」そこまでを云うと首だけをしゃく

り上げるようにお店の暖簾を見たのでした。

「おばあちゃん、それは私の知っている人ちゅうこと？」

「そうや。同級生かもしれへん。年下のほれ…、なんちゅうたかいねえ…、せやせやお里ちゃんかい。かもしれへん。どこの誰がいつお客はんになるかもしれへんのや。お千代…、人間の勝負処云うのはな突然来る。その時のために今は心の唇をグッと噛み締めて色んな知恵を溜めなはれや」そう云うて笑うのでした。

「わかった。わかったけどわからんのがな、ぐーにーはんってのはなんやの？」

「ああ、それは質屋のこっちゃん。むかーしな、質屋云うもんは博打場のすぐそばにあってな、博打で負けて借金こさえた人や、もうひと勝負したろおもた人たちが、身ぐるみ預けていったところやったんやな。博打場ではな、五という数字をグいうてな、ほして二は、二のままや。ほしてな、奇数を半、偶数を丁いうて二つのサイコロや花札でな、出た数字の丁半を決めるいう博打があった。五と二を足すと七やろ、質屋の七に通じますやろ。ほして七は半の目になる。せやからグーにーハンなんやな…。昔はな、チョイとイカレタ博打うちは質屋をグ二屋いうて呼んでましたからな。にしてもこれまた、こまっしょくくれたガキやな」

祖母はそういうと声をたてて笑うのでした。

次の日、私が学校へ行くといつもの子達が徒党を組んで「ぐーにーはん」と私のあだ名を呼ぶのでした。そこへなあ、いつもは教室でもひとりでおる男の子が現れるやいなや、三人の男の子たちを一瞬でけり倒してしまつたのです。

私はその光景にあっけにとられ何も言うことが出来ずただ眺めることしかできしまへんでした。

その日の午後の休み時間のことでしたか、私が教室に戻ってみると男の子二人が言い合いをしてました。言い合っている一人は、私を助けてくれた男の子でした。もう一人方は町の相談役をしている家の小倅でした。

「偉そうなことぬかすんやったらな、家の家賃払ってからにしてもらおうか」

「お前になんの関係がある！ 親のこっちゃんいかい。わしに関係あるかい！」そう言い合っていたのでした。どうやら私を助けてくれた男の子の家は窮していたようであり、教室の中でも何となくそんな話は出ていましたが、その話を聞きつけた小倅が朝の仕返しとばかりにみんなのいる前で窮状を暴露してしまつたんですなあ。

そうなのです。朝蹴り飛ばされた中にはその小倅も入ってましてん。

それからその男の子は教室で一人でいることが多かつたようで、気になり時折みると、いつも教室の窓のそとに広がる空を眺めてはってねえ…。雨の日も晴れの日もでしたなあ。

あれから二十年が過ぎたころですやろか。暖簾を…、そう、こう肩をすばませ首を前に突き出してぐるお客はんがいらいっしやいましてなあ。

時計をひとつポンと番頭席にぞんざいに放らはると「二千円貸してくれ」云いはります。品物をみさしてもらいましてな「七百円」しか貸せませんいうと、大きな舌打ちをするとそれでいい云わはりましてん。

「ほな、何か名前の分かるもん出してください」私が云うて出さばった身分証をみて驚きました。町の顔役・相談役の小倅でしてんなあ。

向こうは知ってか知らずか、私の顔など一切みいしまへんでした。

お金を渡すと肩で暖簾を切るように、颯爽とお店を出ていかはりました。

【おばあちゃん、あんたは偉いお人やったなあ……、来ましたで、来りましたがなあ】

私は一人そう笑ったものです。

私は鉄さんを見ていると一人でいたあの男の子のことを時折思い出したものでした。どうしてはるやら……、良い一生を送ったであろうことを観音さんに祈るのです。



鉄さんから送られて来る絵ハガキの秘密、それはどのハガキにも一人の人間も描かれていなかったことだったのです。

人が住んでいる集落や、田畑が描かれたもの、そして山間の小径、冬の雪道……。どの画にも一人も描かれていなかったのです。寂しいんやろうなあ。苦しいんやろうなあ。なんて寂しさを抱えたお人なんやろう。わたしはそう泣いたものでした。

その後、鉄さんの画集が発売になると聞き、わたしはその画集を買わしてもらいましてんけどな、そりゃあもう小さな字で説明が埋め尽くされてしまいましたから松枝に読んでもらいました。すると……「立派な画や大作を描こうとは思わない。寂しいんだから寂しい画を描きたい」と鉄さんの言葉が載っていたのです。

「お義母さん、鉄さん寂しかったんですなあ」松枝がそう言葉にしました。

「寂しかったんとちゃうねん、あの人は今でもずっと寂しいままやねん」そういうと私はまた声をあげてオイオイ泣いたものでした。

その五 お千代の秘密

ねえ、観音はん。どんなお人かて墓までもってゆくことの一つや二つありますやろ？ ほれが大きくて重くて苦しゅうて……あんさんも色々忙しいやろけど、些かお迎え遅すぎやしまへんか？ お迎え忘れてしもうてるんどちやいますの？ 待ちくたびれましたがな。

鉄さんの秘密はな、いうたかて寂しさに沈湎(ちんめん)してはってきただけのことですやろなあ。まじめなお人やから、ましてお坊さんの検定試験をとったお人。人の道を踏み外すようなことはしてませんやろ。せやけどね、お人のことちゅうもんはよう聞いてみにや分からんもの。聞いてもしまへんのにべらべら自分から喋るお人もおれば、聞かれてはじめて重い口を開くお人もいてはるように、お人も色々ちゅうことですねんけどね。

私の場合ねえ……。お商売柄、毎日毎日大勢のお客はんが来てましたやろ。それがみんな金策に来てはるお人ばかり。小さなころからお人の表裏ちゅうもんを目の当たりにしてきました。お婆ちゃんを「うねさんは観音はんみたいな人や」ちゅうて崇め奉っていたお客はんが一步外へ出ますと業肚(ごうはら)さらして「あのウネだきやほんまに」なんていうことは日常茶飯事でしたがな。

一度、お婆ちゃんに云うたことがあります。

「お婆ちゃん、あんなあゝこのあいだ来てた闇市のお婆ちゃんおるやろ、うん、そうやあ。あのお婆ちゃんな、ウネはんはほんまにケチやでいうて他所のお婆ちゃんに話してはるの聞いてしもうたんや。なんであんなこと云うんやろ……せやかて、あのお婆ちゃん、うっとこ来てお婆ちゃんを観音はん云うてはったやん」と。

「お千代な、お人はな都合を抱えながら生きてますのんや。その都合はなこのご時世お財布の重さで変わるもんなんやねえ。お千代の帯に結んだ巾着袋さんなくその中にはお飴さんがはいつてますやろ？ 沢山入っているときにはお友達にあげますな。少ししか入ってない時はどうします？」

「帯と着物の間にかくすわあ」

「それがお人の都合ちゅうもんや。うちがな闇市でまけてくれと云わへんのもうちのお商売の都合や。残念やけどな、損得勘定がお人の都合を左右する。でもなお千代、お釈迦さんのな善因善果、悪因悪果、自因自果ちゅう教えを守ってはいたら、人の道は踏み外さんで済むからな忘れたらあかん。ほれと、一つだけお婆ちゃんと約束や」

「お婆ちゃんとの約束多なってきたからな、うち、ひとつひとつ書いてるねん、チョット待ってな……はい。ええよ」

「お千代は偉いなあ……お婆ちゃんは、もう云うたそばから忘れるのに。ええか、これからはな、外で大人が話してはることはお千代ひとりのヒミツにしなければ。お母ちゃんやお父ちゃんにも云うてはいかん。

もしもなどうしても人に云いとうなったらな、仏壇に向こうて話しなはれ。口は禍の元。うちにとつてはご飯の元や。これはな、お千代がおおきゅうなつたときのための知恵や。もしもお千代に悪口を聞かれたとわかつたら、あの闇市のおぼちゃん、うっとこのお店に来れなくなるやろ？ ほしたら、だあれも得しまへんなあゝ見ざる云わざる聞かざるちゅう諺がありますねんけどな上手をいうたもんやで、そういうこつちゃ」

「せやからやろなあゝ妙に世間ずれした大人びた子供に育ってしまったのは。男はんを好きになつたのも早かつたなあ。それも随分歳の違うお人でしたんやけどな。」

「ほれが不思議な縁でしてなあゝ鉄さんにも話したことがあるんですけどな、鉄さんも吃驚してはりましたなあ。ええ想い出ですわ……。」

「あれは私が十歳ぐらいの時でしたなあゝせやから確か明治は十七年の初夏のことですやろ。例によって私やお里ちゃん、仲良しのお友達と夢殿さんの境内で毬つきをして遊んでたときのこと。」

「夢殿はんのお堂前が俄に賑やかとなりだしましてな、何やら修業のお坊様たちや洋風の服を着はつた人たちが押し問答をしてはる様子が伝わってきました。お坊様たちは徒党を組み堂前に人垣を作つてはりましてんけど、ほれがなみんなして盛んに「崇り」の言葉を口にしてたものやから、私達は驚き顔を見合わせ遊びの手を止め遠巻きに眺めみたものでした。」

「お千代姉ちゃん… たたりやて。怖いなあ、誰ぞなんぞしたんやろか」

「わからんねえゝでもなあ、ほんまに崇り(たたり)やったら官長はんもいてはるやろしなあ」

「せやねえ…」

「それとな、なんや外国のお人が二人ほどいてはるやろ？ ほれと若い日本の男の人」

「…：お千代姉ちゃん、うちチョット様子見てくるわ」云うが早いかお里は手にしていた毬を人垣がけて蹴り出すとヤーヤー云いもって走り出してしまいました。お里は顔馴染みの修行僧の後ろにまわり込むと袖を引いて話しはじめました。手をな、こうして菱餅さんの様に合わせはって内緒話をするように。程なくして帰ってきたお里がみなに報告したところでは、どうやらこの『夢殿』を開けようとしているらしいということでした。嘘か真(まこと)か夢殿はんは二百数十年に渡って開けられることが無かつたと伝わってましたから、それはそれは一大事(いちだいじ)だ。お里は皆に告げると「うち、お母ちゃんに知らせてる」いうと言葉も終わらぬ間(ま)に駆け出していました。

「ひとり、また一人と」うちも、うちも」云いもってその場を離れてゆくのですが、私はなにか事の成り行きを見守りたい衝動にも駆られましてな…、あと外人さんと若い日本人の男の人に云いような興味をおぼえ動けなくなっていたのです。

【崇りいうて騒いではるのは…きつとあの人たちが開けはるからなんやろなあ】

「さぞかし錆びついてはつたであろう錠前を、ガチャリガチャリと解錠しようとする音がここ(…)まで(…)響いてきます。扉もガタガタと震えてましてん。」

修行の僧のひとりが「どうかお待ちください」と懇願してはつたものの程なくすると鍵が解かれ扉が開

けられました。

寺の僧の多くは崇りを畏れ開扉の前にはおりませんでな。

二人の外国人さんと一人の日本の若い男の人は開け放たれた扉口で靴を脱ぎ、草履を取り出し履きはじめました。

【あゝ…入るんやわあ…】そう考える間もなく三人の男衆は行燈を手に堂内に歩みを進めました。中には一人ぐらいい居るものなんですよろなあ。物怖(ものおじ)せんと怖いもの見たさが勝った者が。

「諦信殿、諦信殿、どうか、それ以上は…」扉の外から声を潜めて押し留めている風やったものの、その声は震え今にも泣きだしそうな具合をみせてましてん。

【いま諦信ていわはったわ。あの日本の若い人もお坊さまなんやろか】

外国の人が何やら喋りはじめたようですが、当たり前のようにさっぱり要領を得ませんですよ。ほしたらなんや日本の若い男の人が話しはじめましてな、「諦信先生は、崇りの心配はなく、雷も火も心配ないので堂内へお進みくださいと申しています」云うやないの。

ほりゃあ吃驚しますがな。諦信いう法名を名乗ってはったんは外国のお人やったんです。

この外人さんが日本政府によってアメリカから招かれたアーネスト・フェノロサであり、日本の仏教と信仰、美術・芸術を守るため東奔西走してはったちゅうことは後(あと)になって知ったんやけどね。なんでも三井寺法明院は桜井敬徳いう偉い和尚さまから諦信ちゅう法名を授かり、改宗まで果たしたちゅうことは後々にあの日本の若い男の人、岡倉天心はんに教えてもらいましてなあ。なんでも狩野派ちゅう絵描き一派があるらしいんやけど、その偉い狩野永恵(かりのえいとく)はんから狩野永探(かのうえいたん)理(り)信(しん)ちゅう画号を持つことも許されたお人やちゅうねんからどれほど才(さい)長(た)けた外人さんでしたんやろ。

三人の闖入者(ちんにゅうしゃ)は仏殿の裏へと回り込むと身の丈七尺に届こうという長物(ながもの)包(つつ)みを眺めはじめましてな、何やらヒソヒソとやってはりましてんけど、「諦信殿、どうかお待ちください。どうかそれだけは、お留まりください」いうて寺の修行の僧が声かけます。

【何が出てきますねんやろ】私は心臓が早鐘のように打ちだしていることに驚きました。

嚴重に木綿布で包まれてはりましたなあ。所々カビがまわってはってなあ、黒ずんでましてんけど、二百数十年ですよろ…。うっとこの柳行李はんより長持ちしてはるわあ。付(つく)喪神(もがみ)さんもいてはるんやろかあ〜思うたもの。いつの間にか数人の修業の僧たちが扉口からお堂内に顔をいれはりましてなあ、一様に宝珠を手に合掌し観音経を唱えてはりまして。

修行の僧たちは多様を見せはりました。泣く者。空を見上げ天変地変に怯えるもの。握りしめた拳を腿の前で組んでいたのは怒りなんですよろなあ。修行仲間の僧の袖を掴み引つ張る者もいてはりまして。数人の坊主さんが伽藍向こうで剃髪頭(ていはつあたま)を寄せ合って何やらヒソヒソとしてはると眺め観れば、懐から金を取り出し、一人の坊主さんに渡してはりましてな〜どうやらあの坊主さんが勝ったんですよ。二百数十年という歳月はそれぞれの中、始末のつけようもなく多様を見せるに至ったの

ですやろねえ。

お堂前の立ち合い僧たちの読む経がひと際大きく響くと、諦信と呼ばれた外人はんがその場に膝をつき手を合わせるや、他の二人もそれに倣い膝をつき手を合わせ一様に首を垂れてはりました。救世(くぜ)観音(かんのん)菩薩(ぼさつ)立像(りゅうぞう)が二百数十年の時を経、神々(こうこう)しい御姿を顕された瞬間でした。後に、この者たちの働きが奏功を見せ観音はんは修復されその後のこの夢殿にお帰りになられたのです。私もなあ気が付いたら膝ついて手を合わせお祈りしてましたなあ。

結局、地震ありません、雷もおちませんでした。火が出ることもありまへんでした。祟りはどこ行きはったんですやろか。きつと観音はんもお陽さん拜めて喜んではったんかもしれまへんなあ。我に返ってみれば、私は事の成り行きを最後まで見届けてましてんけどな。

このときです。外国のお人達が表に出て来はるとうちのどこまで歩いて来はってね、うちの前で小さくかがみはるとポケットから綺麗な紙に包まれたものを私の手に握らせましてな。美しい顔立ちの外人さんでした。すると天心はんが「お嬢ちゃん。いいものを貰いましたねえ、それはね、キャンディーという外国の飴ですよ。フルーツフレーバーの美味しい飴」

「フルーツフレーバー？」

「そう。果物の匂いと味がするキャンディーだね。僕はこの紫色のキャンディーが好きなんだ」天心さんは私の手を左手で受けはると右手の指先でその紫色した包み紙をつまんでみせました。あんな、こんな若いお兄さんに手なんか触られたの初めてですやろ。一瞬にして顔が湯たんぼはんのようにあつっつなりましてなあ。この日からや。しばらくは天心はん、天心はんいうて追いかけてまわしましてなあ、これが私の初恋でしてんなあ。

後(のち)に岡倉天心はんが校長をつとめる美術学校が東京にできたことは風の便りできいたんですけどな、その話を鉄さんにしたんやけど、ほたら鉄さんはその学校に通ってはたいうやないの。驚きましてなあ、なんや急にはずかしゅうなつてもうて鉄さんの前で顔を紅(あこう)したものです。

うちがねえ、天心はんとは仲よう話してるのをみてな、快(こころよ)く思わんお人もおってなあ。うちがお喋りしていると必ず割って入りよるんですわ。ほしてはあのちんまい手で菱餅つくりはっての内緒話し。ほんまにいけずな子でしたわ。

うちのな秘密のひとつはな、あるときもろうたキャンディーが今でも柳行李の中にある、小さな茶箱の中に大切になおしてることですわね。天心はんがつまみはった紫色した葡萄のお飴さんを……。

ほろ苦い想い出もあります。焼け火箸を押し付けられたような想い出もあります。甘酸っぱいものやらケツタクソ悪いものもありますねんけどな、ここまで生きてきますと、どんな思い出もみんな有り難いものと思えてきますわね。せやけどなあ、業火に焼かれるような想い出だけは苦しいものでな、これだけは誰にもわかりしまへんね。

ほしてな、きつとな、わかってもらおうと思うてはあきまへんね。

お人に云いとうなったらな、観音はんはんに聞いてもらうほかにあらしまへんねん。

その六 ことわり

なんですよろなあ、なんかねえ色んな声が聞こえてきますねん……。とおーくのほうなんですやろなあ。これまたおかしな塩梅になってきましたなあ、たしか私、画を鑑ていたはずなんやけどなあ。ベンチに座らしてもらって。

いろんな声が「お千代はん、お千代さん、お千代ちゃん」いうて呼んではることはわかりますねんけどお顔がみえへんよって。

なんやの、お里の声もしてるやないの……。フフツ、お里ちゃんあんたのことは声を聞いただけで分かるわ。お嫁さんたちには優しくしてやりや、せやないとあんた、閻魔さんにいじめられるで。

「お義母さん、お義母はん……。しっかりとください、お義母はん……。」松枝でっしゃろなあ、私のスポンのベルトを緩めようとしてもしてるんやろうけど、不器用なこでしてなあ。なんやベルトが取れしまへんのかいな……。松枝はん、あんまりほうして振ると、お腹の皮が擦れて痛いですよ……。あちゃあああ あかんかあ……。痛ないわあ。

ん？ なんて、松枝はん、なんていいはったん？ 鉄さん？

こりゃあかん、あきまへん。おきんや……。松枝はん、あんたうちのズボンどうしてくれはりますてん、チャンとズボンはかせてますやろなあ。

「お千代さん……。わたしですよ、鉄です。画、観てくれましたか？ いい画でしたか。扉口の明かりはね千代さん。あれはあなたに貰った明かりなんですよ」

微かに見えていたはずの鉄さんのお顔が次第に暗がりやに落ちてゆくと、周りの声も聞こえんようになりましてん。

ほうしましたらなあ、目の前がばあっと明るくなったとおもたら……。その光の中に観音さんがおわしてなあ、こういいよる。

「お千代、進むとき来たり」と。

「なにをこの期に及んで…何処に進みますねんな。観音はん何処であぶら売ってはりましたん。……フフフありがどうなあ、やっとなげますなあ」

風も吹くなり

雲も光るなり

生きてる幸福は

波間の鷗の如く縹渺と漂ひ

生きてる幸福は

あなたも知っている

私もよく知っている

花のいのちはみじかくて

苦しきことのみ多かれど

風も吹くなり 雲も光るなり。

【天上天下唯我独尊、善因善果、悪因悪果、自因自果】云うてみれば帳尻ちゅうことなんですやろねえ。

与えられた命を生きるちゅうのは、身の丈に応じた禅問答みたいなもんですやろね。

ところで観音様、訊き難い話しやけどね〜あんさん幾つにならはったんかえ、えっ？ 満か数えかて……

そな細かいこと気にしますかいな、あの世の理(ことわり)で「

その七

「なごり藤」

なんやの……、お千代姉ちゃん…… あんたあ、こんな処で寝てはったら風邪ひくわ。

松枝はん、あかんよ…… はよ起こしてあげにゃ、いつまでもこんな処で寝かしてたら風邪ひいてしま
うがな……、姉ちゃん、お千代ねえ……。

……うちがなあ、お千代姉ちゃんを何度も何度も、起こそうおもて揺すってましたらな、周りで取り巻
いてはったお客はんたちが、皆して合掌して泣いてはりますねん。

「……なんでや……、うちな、お姉ちゃんと約束してるねん。似たもの同士なんやから、一緒に逝きま
ひよなちゅうて……、せやから……起きにゃならんねん……お姉ちゃん。あと三カ月もしたら……
春日大社はんの藤棚も盛りになりますやんか……、毎年一緒に行きましたやんか……、今年もいこなっ
て云いましたやんか……」

にしてもお千代姉ちゃん……あんた、どこどこまでも都合のいい一生でしたなあ。

羨ましい一生ですがな……大勢の人たちに看取られて法隆寺はんの本堂、観音様の足元であがりはるっ
て……こんな都合のいい生き様、死に様ありますかいな。

羨ましい話しやないの……。



昭和六年六月三日。水曜日。

今日はな友引でしてん。朝からお母ちゃんが五月蠅うてなあ次から次に用事を云いつけはるねん。躰
はひとつやちゅうねや。

どの道、嫁の文子に手伝わせるちゅうたかて、とどのつまりの悪者はうちになるやろし。どうせ悪者に
なるぐらいやったらええねん。按配良いところで文子にまかせて遊びに行ったらうなりますやんか。今
日はどこ行ったりまひよ……

「文子はん…… 文子（ふみこ）はん、あのなあ、大女将がな店横の倉庫ありまっしゃろ、ほの中を片付
けて欲しい云わはってますねん。あんた悪いけどチョット手伝ってくれるか。二人でやれば早いですや
ろ。……あたり前やがな、あんた一人にやらせませすかいな。おや、あんたなんやのその蟀（こめ）谷（か
み）……どうしはったん？夕べか？ほんなどころにお灸すえたって、あんた、火傷でもしはったらどうし
ますねんな。紅（あこ）うなってますがな。頭痛（あたまいた）いてか、ほりゃあ気の毒なこっちゃ。片付

けおわたらなゆつくり寝てなはれ。大女将にはうちから云うとくし。ほなチャツチャやりまひよか」

そうやがなあ、どこ行ったりまひよ……思うてたんやけど、文子がなんや頭が痛い云いはってなあくなんぼうちかて……いやいや、ほないなことできますかいなくおもうてな一緒にやりましたがなあ片付け。まあ、要領の悪い子でしてなあ、柳行李を持たせれば腐った行李の底は抜ける、鍬を片付けさせれば吾(わが)の足に落とす。鼠が走り回れば腰抜かす。嫁に来てから何年たってはりますねん。

「おかあはん、古道具屋て何するところですか？ ……ほな質屋さんみたいなもんやろね」文子が嫁に来るちゆうて決まったときに最初に聞かれたことがこれでしてな。云うてええこと悪いことちゆうのんがわかりしまへんねなあ。グニ屋と比べよるちゅんは何事かちゆうて怒りましたがな。こんときな、うちもう一つ癪に障ったことがありましてな、質屋を「さん」付けにしてからに古道具屋には、さん付けせえへんかったんですわ。

うちな息子に云いましたん。

「ええか、古かろうが新しくかろうが道具は道具や。文子はんはちゃんと教えなはれ。うちこのお商売を云うときは道具屋さんちゆうて云うように」てな。

なんやこの日記も小言と愚痴ばかりになってきましたがあな。

今日は片付けが終わってからなお千代姉ちゃんところ行きましてな、一緒に春日神社はんに詣でましてんけどな終わりがけの藤花がそれはそれは美しくうに咲いてましてなあ……



「……ん？歩くのはやいて？お千代姉ちゃんが遅いだけやんか、大体お姉ちゃんは昔からなんでも遅うてな、早いのは男はんに手エだすことだけでしたやないの(笑)あのチンマイころからやから、うちは敵(かな)わんわあおもて、いつもお姉ちゃんが飽きはるの待ってましたがあな。

……お千代姉ちゃんは二言目にはうちの内緒話したこと云いますねなあ、ほおかあ……お姉ちゃんに内緒話したことありまへんでしたかあ、またあ、そんなイケず云いはってからに」

むかし話しをしてもってな歩く道ちゆうのも良いもんでしてなあ、道端で首を垂れる菜花が初夏の風にそよぎますねん。

水無月に

ともにあるきて

祈るみち

無病息災 夏越しの祓

歩きはるのが遅いお人と歩く道もかけがえのない道に思えてきましたなあ。

「ほうやで……何を云うてますねん。春日神社はんの式年遷宮のときの正遷宮の大祭は去年の十一月十

日でしたやないの。一緒に行ったやないのお姉ちゃんど。……そうですね、あんどきな、お姉ちゃんお神輿担いではった男はんのお尻ばかりみてはって(笑)
なんて云うたか覚えてはります？ 知らん？ ほな教えてあげまひよか？ あんな、みんないいお尻してはるなあ〜ももひぎ三年しり八年〜云いはったんよ。
忘れますかいな……えっ？ うちがかえ？ そんなこと云いますかいな…なんやのそれ……お千代姉ちゃんあんたもしっかり覚えてはるやないの……云うてるまに着きましたなあ。あゝええ藤花さんやねえ〜 あそこに座って休まひよ」

春日神社境内の藤棚はんはなごりをみせてましてなあ。盛りは、終(しま)いちゅうことでしたんやろなあ。うちらもボチボチ盛りは終わりなんかもしれまへんけどな、名残(なご)りには名残りの楽しみ方であり美しさちゅうもんがありましてな〜

茉莉花の

にほいににたり

藤の花

名残りつきせぬ 似たものどうし

ほうやったわ〜文子の頭痛(あたまいた)は治ったんやろか。

………姉ちゃんな、あんた、最期の最後まで抜け駆けしてからに。
うちも追っ掛けいくしな。待っててや。

お千代姉ちゃん………内緒話し、しましたで。

了

あとがき

夢殿を書きはじめてから5年目を迎えるわけです。

スピノフの「なごり藤」を含め、8作品目となるのでしょうか。

今回の太宰治賞への応募は、そういう意味での一区切りをつける〜という意味合いもありました。

5年の間に足りない部分でありを少しずつ形にした結果の集大成がこのコンペ版ということですから、正直なところ予選に通るか通らぬかも、私にとっては大きな問題でも無かったです。

もしもこの作品を一度に一気に書いていたとしたら、悔しがっていたかもしれません。

だから、悔しがるには値しないのであります(笑)

想えば、随分可愛がって頂けました。

この作品を「わたし」と感じながら読んで頂けたあなた様もいらっちゃったかもしれません。

どの様に読んで頂けても良いのですが、こんな取っ散らかった書き手も居たと覚えておいていただければ、有難く存じます。

三月から四月にかけて術前入院と脾臓の手術入院が続きます。

もしも万が一、4月8日を過ぎてもアメブロやnoteの原稿に更新が無かったら……

逝ったものご理解くださいWWW

チョット、小さくない手術を抱えており、何が起きるか分からぬものと考えております。

アメブロの4月10日以降の予約投稿を楽しみにしててください♪

病院名はもとより医師の名前から実名リリースしております(笑)

またここであなた様皆さんとお会いできますことお祈り申し上げます。

小説 夢殿 『秋涙』 コンペ版

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
